

地域資源生かし

経費節減

みちのくあじさい
加工組合 一関・舞川



まきボイラーを導入

一関市舞川のみちのくあじさい加工組合(組合長・伊藤達朗)は9日、同地区の加工施設にまきボイラーを導入した。電気料金の値上げが見込まれる中、間伐材を地域資源として活用。操業に必要な熱エネルギーを確保し、経費節減を図る。

同組合は同園産を中心
にアジサイを加工。生花
のようなみずみずしい質
感を持ったフリザーブド
フラワーを製造してい
る。染色の工程で大量の
湯を必要とし、これまで
は電熱器などで水を温め
てきたが、熱効率が低か
った。

導入されたボイラー
は、アーク(新潟市)製
の2段燃焼式。県内外の
東日本大震災被災地の臨
時入浴施設などで使用さ
れた。6次産業化のモデ
ルとして同組合の事業を
支援している県が仲介

みちのくあじさい加工組
合の加工施設に導入され
たまきボイラー。燃料に
は間伐材が活用される

し、役目を終えた機材を
引き取った。併せて用意
したタンクからの水を温
め、施設内に供給する。
同日は同社の技術者立
ち会いの下、同組合の担
当者が実際にボイラーを
稼働させ、取り扱い方法
を学んだ。今後は染色を
終えたアジサイの乾燥や
暖房への使用も検討す
る。

間伐材の大半は最終的
に焼却処分されるのが一
般的。一関地方森林組合
長でもある伊藤さんは
「捨てていた物が再利用
につながる。電気料金

も下がる心配がないの
で、地域の資源を生かし
て賄いたい」と期待を寄
せる。

仲介を担当した県南広
域振興局一関農林振興セ
ンター林業振興課の中村
文治上席林業普及指導員
は一関内の林業者の間で
も間伐材の利用はまだ一
般的ではない。役立てる
ための仕組みをつくるこ
とで、地域経済が少しで
も回るようになれば」と
話していた。

企業人が語る働く喜び

北上川流域 一関中で出前授業
ものづくりネット

北上川流域のものづくり
ネットワークの出前授業
は7日、一関市真柴の一
関中学校で開かれた。1
年生91人が、地元企業の
代表者による講話や作業
体験を通じて働くことの
意味や自身の将来につい
てを目的に2006年に

いわい美術振興協会(木村正理事長)の創
立20周年を記念した「いわい美術展」は9
日、一関市大手町の一関文化センターで始ま
った。節目を飾るにふさわしい会員らの力作
が来場者の目を引いている。12日まで。
同協会は一関地方を中心に活動する30〜80
代の美術愛好者約60人で組織。「美術の盛
んな地域づくり」を目標に、年に数回の展示

会で活動の成果を発表している。
13回目となる今回の展示会には、会員と一
般参加者合わせて38人の油彩や水彩、造形、
版画など49点を展示。テーマやサイズも自由
で、風景や静物、抽象と幅広いジャンルの作
品が並ぶ。
このうち、阿部彌八さんの「秋の祭時山」は
赤や黄、オレンジなど温かみのある色を重
ね、燃えるような秋の山々を表現。熊谷祐吉

バナナブラウニーの生地を型に絞り入れる子供たち



節目公演 成功期す